

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月20日現在

機関番号：34504

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730567

研究課題名（和文）死別後の不適応リスクに応じた遺族ケアの方法と効果に関する研究

研究課題名（英文）Methods and effects of care matching with the levels of risk for maladjustment after bereavement

研究代表者

坂口 幸弘 (SAKAGUCHI YUKIHIRO)

関西学院大学・人間福祉学部・教授

研究者番号：00368416

研究成果の概要（和文）：本研究では、遺族のリスクやニーズを明らかにするとともに、それらに応じた新たな遺族ケアを開発することを目的とした。NICUの医師を対象とした調査では、リスク要因の一つとして「急変による死」が明らかにされ、多くの回答者が遺族ケアのニーズはあると認識していた。新たな遺族ケアとして、ワーク形式による介入を実施し、一定の有効性が示された。また、遺族ケアのツールとして絵本の制作を行い、調査の結果、その有用性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purposes of this study are to investigate risk factors for maladjustment of the bereaved and their needs and to develop effective bereavement services matching with their levels of risk and needs. Results showed that most physicians at neonatal intensive care unit indicated “death by sudden change” as a risk factor for maladjustment. Most of them perceived that bereavement care services were needed. We took new intervention for the bereaved by using work sheet. The efficacy of this project was supported by bereaved participants. And a picture book for the grieving persons was developed as a bereavement care tool and its usefulness was suggested.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学、臨床心理学

キーワード：死別、悲嘆、遺族ケア

## 1. 研究開始当初の背景

遺族ケアは、一次予防的介入、二次予防的

介入、三次予防的介入という3カテゴリーに分類される。一次予防的介入とは、介入の適

応があるかどうかにかかわらず、全ての遺族に予防的に援助を提供することである。二次予防的介入とは、不適応のリスクが高い遺族を対象を絞って早期に提供される援助である。そして三次予防的介入とは、複雑性悲嘆や、併発した精神疾患に対して行われる介入のことである。わが国の遺族ケアの現状としては、ホスピス・緩和ケア病棟を中心に一次予防的介入は広まりつつあり、また三次予防的介入の試みも進みつつある。しかし一方で、「リスク評価 (risk assessment)」に基づく、二次予防的介入はほとんど行われていない。このリスク評価とは、死の状況や心理社会的機能水準によって、第三者からの援助なしにはうまく適応できない可能性の高い遺族を選別することである。リスク評価によって、限られた人的・時間的資源の中で、全ての遺族に同様のサポートを提供するのではなく、死別後の不適応が予想される高リスク遺族に重点的なサポートを提供することが可能となる。そして、介入の効果に関しても、適切なリスク評価によって、介入の有効性が高まることを示唆されている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、限られた社会資源のなかで効果的かつ効率的な遺族ケアを提供するための一つの方策として、死別後の不適応リスクに応じた遺族ケアの方法を開発することである。その将来的な実現に向けて、本研究では、主に次の2点を目的とする。

- 1) 不適応遺族のリスク要因および遺族ケアのニーズに関する検討
- 2) 遺族のリスクやニーズに応じた新たな遺族ケアサービスの開発

## 3. 研究の方法

### (1) NICU に勤務する医師を対象とした調査

27施設の新生児特定集中治療室 (NICU) 責任者を通じて、自記式質問紙を186部配布したところ、140名の医師から回答が得られた (回収率75.3%)。性別は男性101名、女性39名、平均年齢は36.8歳であった。医師としての臨床経験は2~42年で、平均12.0年であった。NICUでの看取り経験は0~10症例で、平均2.96症例であった。

### (2) ワーク形式による遺族ケアの試み

対象は、葬儀社によるグリーフサポート「

ひだまりの会」に参加した遺族である。実際の手順は以下の通りである。①事前準備として、宮林 (2002) を参考に、季節がめぐり、散りゆくはっばに故人をたどった物語の大筋を作り、「故人との思い出」「故人が亡くなった時の気持ち」「故人から残された方へのメッセージ」「残された方から故人へのメッセージ」「これからの自分」について、遺族が記入するためのワークシートを作成した。②「ひだまりの会」に参加した16人に、はっばの物語のワークへの参加を呼びかけた。参加は任意として、ワークシートを持ち帰って記入された方には、郵送にて期日までに返信してもらった。③返信いただいた7名の物語を集約、再編成し、一つの物語にした。物語は、はっばの春夏秋冬を描いたストーリーで、特にはっばが散る瞬間とその後に重点をおいた。④完成した物語に、実際のはっばの写真、音楽を組み合わせ一つの映像作品 (約16分) にした。⑤後日、出来上がった作品を、物語の朗読とともに、「ひだまりの会」の参加遺族の方 (約15名) に鑑賞していただいた。その後、遺族同士での分かち合いの時間をもった。

### (3) 遺族ケアツールとしての絵本の制作

調査1として、作成した2パターン (案) の絵本 (一般大学生67名 (男性17名、女性43名、平均年齢21歳) に提示し、物語としての筋道 (分かりやすさ/感情移入/長さ/文体)、絵 (色彩バランス/文字とのバランス/タッチ) などに関してそれぞれ評価を求めた。その結果を踏まえて一つの絵本を改良し、調査2として、子どもを亡くした母親ら11名 (平均年齢49歳) を対象にあらためて評価を求めた。亡くした子の死亡時の平均年齢は14.0歳であった。

## 4. 研究成果

### (1) 医師から見た不適応遺族のリスク要因

「これまでに関わってきたご家族 (ご遺族) の中で、特に死別後に配慮や支援が必要と思われた人はどのような方が多かったですか?」との設問に対して、「急変により子どもが亡くなった」との回答が64.3%と最も多く、次いで「患者の病気や病状などの現実を受け入れられていなかった」が45.7%、「自分を責める傾向があった」が40.7%であった。

またこの調査では、遺族のニーズに関して、56.4%が「遺族には大きなニーズがある」と回答し、35.7%が「大きくはないが遺族のニーズはある」と回答していた。ただ、病棟と

して遺族ケアを行う必要があるかとの問いについては、行うべきとの回答が60.7%に対して、必要だと思いが現状としては難しいとの回答も32.9%みられた。病棟として遺族ケアを行ううえでの問題や障害については、組織としての体制が十分ではないこと、病棟が行う支援の範囲が明確でないこと、援助者のトレーニングが十分ではないこと、配慮や支援の方法がよく分からないことなどの回答が多く挙げられた。

### (2) ワーク形式による遺族ケアの効果

参加遺族への事後アンケートによると、ワークシートに記入することで、自分に向き合えたという意見が得られた。自宅でのワークという形は、自分のタイミングで自らの気持ちと向き合う場を設けるきっかけになったと考えられる。自身や故人をはっぱにたとえることで、気持ちをいくぶん表現しやすくなった可能性もある。また、ワークは行わずに、映像作品を鑑賞したのみの人からは、物語の中に出てくるさまざまな意見が参考になったとの回答が得られた。一人ひとりの遺族の言葉を紡いで一つのストーリーにすることで、ワークを行わなかった人にとっても、他の遺族の体験や考え方を知ることができ、有用であったと思われる。アンケートの結果は概ね好評であり、「はっぱにたとえたのが良い」「涙したが、頑張ろうと思った」「意見を共有し、落ち着いた」などの感想もみられた。今後の課題としては、作品時間の短縮と、効果の精緻な検証が必要である。

### (3) 遺族ケアツールとしての絵本の評価

一般大学生を対象とした調査1において、「落ち込んでいる時に読みたいか？」との設問に対して、83.6%が「そう思う」「ややそう思う」と回答した。「人に勧めたいと思うか？」との設問に関しては、54.7%が「そう思う」「ややそう思う」と回答した。

子どもを亡くした母親ら11名を対象とした調査2では、「落ち込んでいる時に読みたいか？」との設問に対して、11名のうち7名が「そう思う」「ややそう思う」と回答した。

「人に勧めたいと思う」との回答も11名中6名から得られた。一方で、「若い方には共感度の高い絵本だと思う」「対象者が子ども向けのような気がする」などの意見もみられた。

これらの結果から、今回作成した絵本の一定の有用性は示唆されたといえる。遺族ケアツールとしての実際の活用法としては、絵本への親和性や好みには大きな個人差があると考えられるため、援助者が一律に積極的な利用を促すというよりは、遺族自身が自らの興味・関心に応じて、自由に手に取れるような形が望ましいと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計10件)

- ① 瀬藤乃理子、坂口幸弘、黒川雅代子、高田哲、小児科医が行う子どもを亡くした遺族への支援：新生児医療に携わる医師への調査。甲南女子大学研究紀要、査読有、7、2013、1-7
- ② 坂口幸弘、子どもの悲嘆とグリーフケア、健康教室、査読無、63(5)、2012、78-80
- ③ 坂口幸弘、高齢者の死別体験とグリーフケア、月報司法書士、査読無、488、2012、8-13
- ④ 坂口幸弘、遺族へのグリーフケアとスタッフ自身のケア、臨床老年看護、査読無、18(1)、2011、15-20
- ⑤ 坂口幸弘、遺族ケア、がん治療レクチャー、査読無、2(3)、2011、614-618
- ⑥ 坂口幸弘、死別による悲嘆とはなにか？、EB NURSING、査読無、11(4)、2011、39-45
- ⑦ 坂口幸弘、複雑性悲嘆とは？、EB NURSING、査読無、11(4)、2011、47-53
- ⑧ 坂口幸弘、悲嘆のプロセスを理解する、EB NURSING、査読無、11(4)、2011、55-60
- ⑨ 坂口幸弘、医療従事者に求められるケア、EB NURSING、査読無、11(4)、2011、61-66
- ⑩ 坂口幸弘、死別ケアに関連する用語の整理、緩和ケア、査読無、20(4)、2010、334-337

〔学会発表〕(計6件)

- ① 坂口幸弘・廣江輝夫・泉原久美、ワーク形式による遺族ケアの試みーあなたと作るはっぱの物語ー、第36回日本死の臨床研究会年次大会、2012.11.4、京都国際会議場・京都
- ② 廣江輝夫・泉原久美・黒川雅代子・岡本双美子・米虫圭子・坂口幸弘、葬儀社によるグリーフケアの試み(9)ーエンバミングに対する遺族の評価と満足度ー、第36回日本死の臨床研究会年次大会、2012.11.4、京都国際会議場・京都
- ③ 坂口幸弘、グリーフケアの今とこれから、第36回日本死の臨床研究会年次大会シンポジウム、2012.11.3、京都国際会議場・京都
- ④ 坂口幸弘、死別した配偶者へのグリーフケア、日本心理学会第76回大会ワークショップ、2012.9.13、専修大学・東京
- ⑤ 坂口幸弘、遺族へのケア 第16回日本緩和医療学会教育講演、2011.7.30、札幌市教育文化会館・札幌
- ⑥ 廣江輝夫・泉原久美・黒川雅代子・岡本双美子・米虫圭子・坂口幸弘、葬儀社によるグリーフケアの試み(7)ーNPO法人

「遺族支え愛ネット」の設立と協働一、  
第 34 回日本死の臨床研究会年次大会、  
2010. 11. 6、盛岡市民文化ホール・岩手

〔図書〕（計 2 件）

- ① 坂口幸弘、講談社現代新書、死別の悲し  
みに向き合うーグリーフケアとは何か、  
2012 年、254 ページ
- ② 古内耕太郎・坂口幸弘、毎日新聞社、グ  
リーフケアー見送る人の悲しみを癒す  
～「ひだまりの会」の軌跡～、2011 年、  
216 ページ

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

坂口 幸弘 (SAKAGUCHI YUKIHIRO)  
関西学院大学・人間福祉学部・教授  
研究者番号：00368416

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：